



Title	There-be構文の本質(I) : このthereは何か?
Author(s)	林, 栄一
Citation	大阪外大英米研究, 9, p. 179-197
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99018
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

There—be 構文の本質（I）

—この there は何か？—

林 栄一

0.序論 教科文法でOnionsに始まる5文型を採用する場合、*There is a book on the desk.* のような文は、通例 SVの第1文型に含めて倒置ということで処理するが、実は大変に苦しく、Is there...?でたちまち馬脚をあらわす。そこで、この構文は別格として「存在文」(Existential sentence)という名称（これはJespersenが*Philosophy of Grammar*で用いたもの）を付与して、「～がある」というときは、この型を用いるといい、文頭のthereは擬似主語とか形式主語とか呼んで、つじつまを合せようとする。しかし、何か貌然としないものが残る。そこで、数多い文法学者がどうしたら矛盾なくこの構文が説明できるかと苦心惨憺しているが、いずれも完全に成功したものはないようである。変形生成文法では、*there-insertion* ということで、一応の処理の仕方が打ち出され、これは一部の学者が反対するほど悪いものではないと思うけれども、問題が多いことも事実であり、次から次へと疑問がわく。どのようなことについても同じことが言えるが、日常の何の変哲もないような言語表現も、いざ本腰を入れて解説する段になると、とても一筋縄では扱いきれないものである。この小論では、紙数の制限もあり、もとより多くを期待できるはずはないが、最も本質的と考えられる若干の点につき、先人の業績を踏まえつつ、筆者なりの考察を加え、及ばずながら「心情的に」納得できるような解説を求みたいと思う。

1. *There*の主語性 今日の時点では、もはや贅言を要しないと思うが、英語の存在文における*there*が、一種の主語として機能していることは、殆どの論者が認めているところであろう。その evidence を次にまとめて示しておく。（例文のうち若干のものは、適当なものが手許になくて辞典その他より借用し

た。)

- (1) There is a book on the desk, *isn't there?*
- (2) *Is there* a book on the desk?
- (3) Yes, *there is.*
- (4) But never once *is there* any mention of Bloch or of his work on Japanese. (A.R. Miller, *Bernard Bloch on Japanese*)
- (5) This time there wasn't even a national campaign for "meatless Tuesdays." *There didn't have to.* (V. Payette, *Consumer Boycott*)
- (6) But instead of *there being* one tactics for the whole language, a separate tactics is believed to exist on each stratum. (D.G. Lockwood, *Introduction to Stratificational Linguistics*)
- (7) And I, *there being* none to settle the difference, must produce both versions. (R.L. Stevenson, *Merr and Books*)
- (8) Then stated kong, the Android Despot: Let *there* today be war within that galaxy. (N.Khan, *Computer No Match for Real SF Writers*)
- (9) You don't want *there to be* another war, (A.S.Hornby, *A Guide to P. & U. in English*)
cf.*Susan persuaded *there to be* a lot of fuss.
- (10) Even *had there been* no war, I would have been in a race against death. (E.Seidensticker, *The Azaleas of Hira*)
- (11) *There is believed* by many people to be a life after death. (R.A.Hudson, *english complex sentences*)
cf.* (For) *there to be* a life after death is believed by many people.
- (12) It's pretty quiet tonight. *There doesn't seem to be* anyone

around. (D.Cavalli, *Winthrop*)

- (13) Why do there have to be wars? (D.Cavalli, *Winthrop*)

いまさら説明は不要であろうが、以上はいずれも英語の統語上正常な主語の位置にthereが用いられている。(ただし cf.で*をつけたものは反例である。)特に注目をひくのはdoが用いられている最後の例で、とうとうここまで来たかという感じさえする。これが更に進むと、存在文そのものではないが、次のようなthereが出てくる。(これについては、いずれ稿を改めて論ずる。)

- (14) No other little girl ever fell in love with you, did
there? (B.Tarkington, *The Flirt*)

- (15) Q: How did there come a time when you worked under the
direction of Gordon Liddy?

A: Yes, there did.

(Records of the Watergate Investigating Committee)

そのほか、関連してあげれば、次のようなものもある。

- (16) There was five or six men altogether. (D.Defoe, *Robinson Crusoe*)

- (17) I've told you all there is to tell. (J.Galsworthy, *The Eldest Son*)

- (18) There was a stranger there. (M.Twain, *A Dog's Tale*)

- (19) He said weakly, "There's no one works harder than you,
Father." (G.Green, *Heart of the Matter*)

これらは、今までのものと少し内容が異なっていて、(16)は複数の存在者があるのに動詞が単数形であること、(17)は従属節に本来の主語が欠落していること、(18)は場所をあらわすthereが文頭のthereとは別に現われていること、(19)は文頭のthere isがit isと代替性をもつこと、などを示し、there-beが一種独特のものである証佐をなすが、だからといって、thereが主語であることを直接に証明するものではない。このうち(16)のみがthereが主語的であることを

支援するものであるが、there-be 構文では数の一一致が常にみられないのではなく、むしろ一致する方が普通なのであるから、決め手にはならない。（ただ「何がその箱の中にあるのか」というような場合は、返答に複数のものが期待されても、*What is there in the box?* というのが普通で、*What are there in the box?*とはいわないことは注目してよいであろう。）なお、(19)のような構文は、文法書では必ずといってよい程記載されているが、現在では次第に使われなくなってきたことも留意しておいてよい。

ともあれ、以上のように、there-be 構文で、thereが主語的に用いられることが多いことは、まぎれもない事実である。諸家がこれにどのような名称を与えているかをみてみると、大体次のようである。

Adverb as anticipative element (*OED*), Anticipatory adverb (Treble-Vallins), Anticipatory subject (Curme, Fowler, Perrin), Anticipatory there (Christophersen), Copied local there (Onions, Fillmore, Kuno), Dummy subject (Hockett), Empty Word (Jespersen), Existential there (Jespersen), Expletive (Bryant), Formal subject (Wood), Function word (Fries, Evans), Impersonal pronoun (Penguin E.Dic.), Initial there (Schibbye), Introductory there (Kruisinga, Partridge, Zandvoort), Lesser subject (Jesperseu), Makeshift subject (Wiwel), Mood-Subject (Hudson), Preparatory there (Allen, Hornby, Jespersen), Pronoun as Function word (Webster), Quasi-subject (Jespersen), Sham subject (Western), Subjectival (Hill), Vicarious subject (Jespersen), Weak there (Poutsma, Sweet)

これらの名称のなかには、Jespersenのように同一人が幾つか異なった呼び方をしているものもあるが、いずれにしても、「主語みたいなもの、一種の主語」というような内容のものであることは共通している。ただし、Penguinと Websterの辞書が非人称の代名詞であると言い切っているのは注目をひく。subjectというのは機能的な呼称であるから、品詞とは次元が異なっているは

ずで、主語になるのは別に名詞や代名詞でなくても、理論上は一向に差支えない。副詞が主語になっていけないということはないのである。（有名な *cannon ball* の *cannon* も、愚見では、*modifier* であるが、だからそれが形容詞であることにはならないと思う。）とはいえ、主語は名詞か代名詞であるのが普通であるから、主語のように働くものが *adverb* であるといわれると、一寸とまどりの素朴な反応であろう。（名詞の *modifier* が形容詞以外のもの（特に名詞）であることは、極めて普通のことであるが、*subject* が副詞であるのは、まず普通とはいえない。）～ *there* という名称は、品詞には全然触れていないどころか、*subject* というのも避けた表現である。～ *subject* というのは *there* の働きに直結しているからまだわかりやすいが、それではそれは品詞としては何であるかというと、答はほかされてしまっている。何も断ってなければ、名詞・代名詞の類と一応は常識的に考えたくなるが、どうもそうではないようで、特に Jespersen は *tertiary* すなわち副詞とすべきだと考へていて。 *There is a book* は彼の *Analytic Syntax* では 3/s VS となっている。これでみると、上記の辞書以外は大ていが *there* は副詞とみていると考えてよいであろう。そして、その副詞が主語的に機能していると解釈しているのである。ここで注意すべきは、「主語」そのものとはしていないことで、*formal subject* と呼ぶ人も、それによって意味するところは普通の「形式主語」と同じではない。いわゆる形式主語であれば、それが *it* であれ他のものであれ、述語動詞はそれと一致するからである。従って、この構文の文法的主語はあくまで *there-be* の次にくる名詞でなければならないことになる。事実、動詞は、既に何度も繰返したように、次にくる名詞と一致するのが通例である。これがいわば泣き所であって、いくら Jordan や Twaddell が *there* を主語だと断定しても、また Penguin や Webster の辞書が代名詞だといっても、この形態上の事実は如何ともしがたい。なお、Hill は、主語でない *preverb* のものを *subject territory* にあるとして *subjectival* と呼んでいるが、彼はこの *there* のみに限らず *here is* の *here* やその他のものもを含めているから、立

場は異なっている。この構造主義による分析は、非常に明快であるが、there-be 構文の there は独自の特徴があり、やはり個別的な手当が必要であろうから、依然として問題は残る。

2. 主語とは？ 前節では、there が「主語的」であるが「主語」とは断定しがたいので、その性格は一義的に説明できないことを述べたのであった。この出発点における aporia を打開するためには、「主語」なるものをどう考えたらよいかを明らかにする必要があると思われる。これは、しかし、とてつもない大きな問題で、たとえば、ひと頃『ことばの宇宙』に連載された 5 篇の論文だけみても、容易に解決がつくことではないのは推察される。このような小論ではそんなことを到底論じつくすことは不可能である。そこで問題をこの存在文だけに限って、必要最小限度に考察してみることにする。

まず、「主語はそれと結ぶ述語に対して立てられる文の要素である」ということであるが、これは論理学でいう SP 構造を、そのまま文法に移した考え方である。のこと自体の妥当性は多分に疑問がある。論理と言語とは別のものであるのは、記号論理学を言語表現に適用してみると、興味ある不一致が随所に発見されるところからも明らかである。しかし、そのような齟齬を追求することによって、言語の特性を解明する糸口をみつけることもできるのであるから、これを一概に拒斥する必要はない。むしろ逆用して、たとえば全面的な主語否定論を日本語に則して立てることもできるのである。ともあれ、何かについて叙述が行われる場合、その何かが主語である、ということは一応頂いておくことにしよう。すると、文法的主語、論理的主語、心理的主語といったものも、どのような種類のどのような深さの層で、それを問題にするかということになる。ところで、このような意味での主語に対して、主題と主格というものが微妙にからみあり。Fillmore の格文法によれば、主語というようなものは、表層における tagmemics でいう slot の一つに過ぎないもので、その filler は必ずしも主格でなくてもよいし、それらと結ぶ動詞と一緒にになって、 proposition を形成し、それが modality に包まれることによって、文というも

のが成立する。全く同じではないが、三上流の modus + dictum と一脈相通ずるところがあることは、しばしば指摘される。筆者はこの propositionないし dictum を示意 (signification) と呼ぶのであるが、これは筆者流の Glossematics の解釈による意図 (purport) の世界であって、これに叙定と述定とから成る叙述 (predication) という modalityないし modusがかぶせられて陳述が成立する。実はこれら三者は全く同じではないけれども、大きなどころでは共通しているものがある。この考え方によると、主 というものは、一番奥深いところでは存在していなくて、それがいわゆる表層構造に有形化して始めて出現するのである。すなわち、主語が問題になるのは、具体的な言語表現においてあって、内面的にいくら SP 関係があっても、それは別の次元のことと、その S を主語と呼ぶのは妥当でないと思う。なお、主題というものは、日本語の「は」によって示されるような関係で、もう一段上のレベルに属する。英語においては、形が文法上の主語と同じであり得るので、文強勢や音調を含めてもっと検討する必要があろう。もし確証があげられれば、主語が消去される可能性は大いにある。しかし、ここでは深入りをする余裕はない。

Brentano-Marty-Funke を結ぶ流れを踏まえて、中島は there-be 構文における（文法的）主語は、 subjectでなく subjectiveであるといい、その理由としてこの構文は単純判断であって、ものの存在を承認（または拒斥）するだけにすぎず、通例の主語 + 述語が示す二重判断と異なることをあげている。すなわち、旧情報に新情報を加えるという SP 関係がないというわけである。これは確かにその通りであって、存在文（現象文も同じ——現象文は存在文の一種と考えてもよい）は、名詞（形容詞）文のような「品定め文」ないし「判断文」や動詞文とは性格が異なっていることは明らかである。三上は絵に描けるかどうかで区別をすると、動詞文は fact であるから可能、名詞文の類は fiction だから不可能、存在文はその中間になるという。その意味で存在文は独特の性質をもっているといえる。このことは主語に対して述語がないということを示す。ということは、主語もないということになるのである。（これと

関連して、存在を示すドイツ語文は Es gibt~、フランス語文は Il y a ~、中国語文は「有」（所在は「在」）を用いることが、よく引用されて、存在する名詞が実は主語でなく、非人称構文における目的語的な性質をもっているとされることも、参考になるであろう。）しかし、これはある意味論の立場からの議論であって、それはそれなりに首肯できるけれども、上述のように主語は表層のものに認める立場をとると、主語に be 動詞が結んでいるとせざるを得ない。もしこの形で主語を認めないとすると、何をか言わんやあって、もともと主語は深層にないのだから、上の意味論的解釈は当然すぎることであろう。

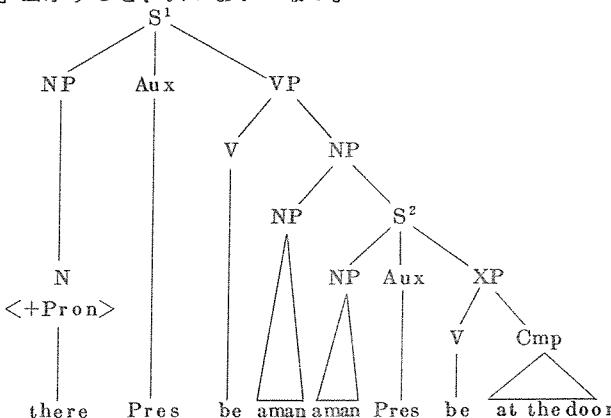
またもや議論はふり出しに戻ってしまったようである。こうなれば、形態上の dilemma は形態上で解くほかはない。 *There is a book on the table.* の a book が、表層以外で主語でないといくら納得のいく説明が与えられても、表層との矛盾がどのようなものかが明らかにされただけで、これは仕方がないことだとすればことはすむが、問題は少しも解かれていないのである。

3. *there* の性格 このような *there* はどうしてできたのか、一寸その発生をふり返ってみると、OEでは今日ならば *there* が使われるときにも、それがない方がむしろ普通であったといわれるが、当時すでにこの構文も存在していたことが、記録に残っている。しかし、これが確立したのは 14世紀の後半と考えられる。次第に語順の重みが増してきたことが、その主たる原因であろうが、当初はそれが場所を示す副詞であったことも、それが空洞化してきたことも、ことの自然な成りゆきと思われる。この構文がゆるぎない位置を獲得すると、文頭に *there* がくるとは限らなくなり、主語強調の *Some bodies there are that, being dead and buried, do not decay* のような文や、ヒラリーやの *Nature is there to help us provided we understand and properly care for environment.* (Morse Saito, *Battling Windmills*) のような倒置が行なわれることになってきた。ここまでくると、*there* は完全に独立したものといえるであろう。（ちなみに、これらの例は、明らかに *there* が主語でないことを示している。）

このような thereが虚辞的な形式語であることはわかるが、つきつめると何であるかというのが、本稿における問題の核心であり、そしていよいよそれと正面から取組む段階が今や来たようである。そこで、もう一度確認しておくと(1) 一致の原則上 there は主語ではない、しかし(2) there は普通主語のくる位置に現われる、という矛盾の解明が課題である。ところで、まず there は代名詞的な主語であるとよく言われるが、there は論者が指摘するような、しばしば代替される it のような代名詞でないことは明確にしておかなければならぬ。しかも、この代替性は古い時代のものであったり、現在あるものもその名残りの特定の表現に限られていて、自由自在に interchangeable でない。また There's a good girl. が You're a good girl. と同一の意味だとしても、形成上は There're でないことがそれを反駁する。there's の次に複数名詞がくることが、一致に対するマイナスの例であるということは、既述したように絶対的な決め手でないし、またこれは別の次元での説明が可能なことである。さらに、… *there is you -- and there is the rest of universe* (Bennett, *Old Wife's Tale*) や *Since I came there has been -- you* (A.E.W.Mason, *The Witness*) のような例を引いて、一致が行なわれていないということ 見当ちがいで、この you は人称代名詞でなくて、客観化された第2人称を示す名詞とみるべきであろう。(「そこに私はいたのだ」は *There was me there* というのが普通である。) それから、there-be は何としても存在を表わす言い方で、上にあげた *There's a good girl.* が *You're a good girl.* の意味になるのは、直ちにそうなるのではなく、*a good girl* の存在があって、眼前の女の子に refer された結果であることを無視してはならないと思う。このようなことから、there は結局場所をあらわす副詞であると必然的に断定せざるをえない。

ところが、これに関連して、there をあくまで代名詞の it であるとし、しかも一致の原則も説明できるという解説を与えたものがある。それは中島(「There is 構文の分析」、ELEC Bulletin, No.28)で、それによると、

There is a man at the door. は (a) *There (=It) is a man.* と (b) *A man is at the door.* の二文が深層構造にあり、それが変形によって融合したものである。図示すると、次のようになる。



すなわち、(a)が matrix sentence で、be は copula 、その NP は NP → NP S²と拡充され、このS²が constituent sentence の(b)であるというわけである。S²のbeは existentialであることはいつまでもない。そうすると、S²のa manはS¹のa manと同一であるから消去され、S²のbeはS¹のbeと同形であるので mapされて融合してしまう。その結合、残ったものは、there be a man at the doorとなる。動詞 is は<+ copula ><+ existential>であるから、この文の意味は「それ（問題になるもの）はa manであり、その人物が戸口のところにいる」ということで、きれいで説明がつく。a man が menであれば、be は当然に are となるから、一致の原則はまもられる。さらに、この方式に従えば、*There is a storm coming.* も(a) *There (= It) is a storm,* +(b) *A storm is coming.* であり、*There was heard a noise* も(a) *There (= It) was a noise.* +(b) *A noise was heard* であり、も一つ都合のよいことには、*There is a man down below wants to see you.* も(a) *There (= It) is a man.* +(b) *A man wants to see you.* であるが、もし *There is a man down below who wants to see*

you. ということであれば、(a)の NP が NP→N, N→NS とすればよいことになつて、萬事きれいに片づく。

以上みたように、メリットとして考えられるのは、普通思いつかない apo koinou を there-be 構文に適用したことで、この考え方は(1)と(2)との矛盾を解消するのに、非常に便利な工夫であり、thereにおける主語性をうまく説明すると同時に、一致の原則をもこわさない。まことに巧妙な解釈というべきであろう。ところが、仔細に検討してみると、どうもうまくできすぎている。ということは、かなり無理があるようと思われる所以である。there を代名詞にするために動詞に過重な負担をかけている。すなわち、thereの矛盾を、 be の矛盾に転換した結果を生んでいる。be は copula の役割と existential の役割を同時に果させているのであるが、これは発生的には考えられても、二つは明らかに別の種類の動詞である。しかし、両者はまだ本動詞として共通するものをもっているが、次に受身や進行形に用いられる Aux の be をも、同じように取扱っているのは、便宜主義の ad hoc な処理ではなかろうか。事実、*There is a storm coming* の埋め込み文が *a storm is coming* で、 is が合一のために前方に出たとするなら、*There was heard a noise* の埋め込み文も *A noise was heard* であるから、同じく was が前方に出でて **There was a noise heard.* という文が生成されなければならないはずであるが、これが非文法的な文であることは明らかであろう。同じく助動詞の be であっても、このようにちがうのであるから、本動詞と助動詞とを融合させることは乱暴であるし、また copula と existential の be を融合させることも無理である。*There are no such things as ghosts.* というような場所規定のない文では、埋め込み文は何になるのであろうか。例示によれば、 **No such things as ghosts are.* とならざるをえないが、こんな文は、そもそもありえないのであるから、いくら深層構造が fiction であるといっても、納得のいく線を越えすぎている。

4. there-insertion
4.1. there = NP

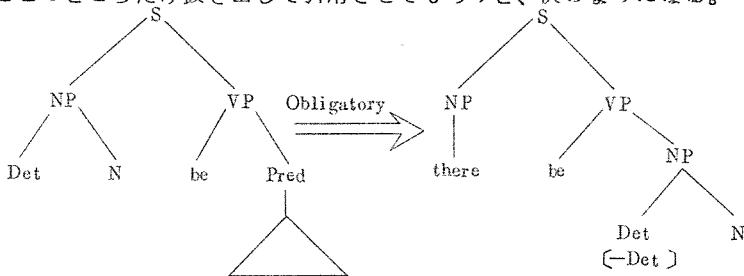
変形生成文法では、一般に *There is a book on the desk.* のような文は、*A book is on the table.* のような文に「there挿入」という変形規則が適用されて出来るものとする。ということは、there-be 構文は深層構造にないということである。ところが、*A book is on the desk.* というような文は、絶対に不可能な文であるとは断定できないにせよ、極めて不自然なものであることは、まず異論のないところであるから、そんなものを基底におくこと自体がおかしいという人がある。変形文法に対して批判的な人は、非現実的なものを深層におくことがあるのに反撥するのであるが、理論の本質上、これはある程度やむをえないのであって、そのことで一般的な説明が可能になればよいと割り切らねばならない。それにしても、3の終りに述べたような、場所規定のない文は、あのままではどうしても頂けないこととは明らかである。そこで、*on the desk*のようなものがない場合は、そこに dummy を置く。すなわち、*no such things as ghosts are* △という基底文を考えるのである。そうすると、一応は形がととのうことになる。

次に、そういう深層構造における文を、表層にもっていく変形規則はどんなものかを検討しなくてはならないが、これにはいろいろな考え方があるけれども、存在文で動詞が existential be である場合にだけに限って考察することにする。（本稿では今まで意図的に存在文だけに限って考えているが、多くの論文では *There began a commotion.* のような、*there* で始まるいろいろな文と一緒に論じている。たしかに、そのような *there* と存在文の *there* とは性格が似ているし、できることなら、一緒にまとめて、より一般的な rule を樹立する方が望ましい。しかし、そうするためには、なお考るべき多くの問題があり、かなり錯綜した関係を整理する必要がある。たとえば、動詞を be 一つに限っても、前にも述べたように、内面的には区別をしなくては説明がつかない現象があることを忘れてはならない。従って、純粹な存在文をまず解明して、そのあとで関係する事項にとりかかる方が、多くのものを同時に扱うよ

りも急がばまわいで、かえって能率的と考える。)まず、一番普通なものは Burt 流に記せば、次のようなものである。技葉を除いて肝心なところだけを 略記しておく。

NP - Aux - be - W または
1 2 3 4 ⇒ Optional
there 2 3 + 1 4

この場合 1 の NP は indefinite であり、4 の W は変項であるから、何が来てもよいわけであるが、標準的には on the table のような locative である。しかし、これだけ簡単にしても、W が ø であるときはせめて dummy を置くとか、またその時は there の導入が obligatory になることは付加しなければならないし、また W は NP や単独の Adj であってはならない制限もつけておかねば、妙な結果が生れる。従って、W を改めて (Loc | △) とし、NP が indef. であることを明記して ⇒ Obligatory としたら、ずい分よくなるであろう。福地 (「存在文の派生」、東教大『西洋文学紀要』、1974) のこれに対する修正をこここのところだけ抜き出して引用させてもらうと、次のようになる。



上に對して、やや異なった処理を示す鈴木 (「There構文覚え書」『英語青年』1973.10) は、動詞が existential be である場合、下記のような文脈素性で表す。

be : [+ ____ ([△] NP | PP)]

(△) は NP の dummy であり、PP は場所を表す前置詞句である。具体的に

示すと、*There is a book on the desk.* は (*a book*)_{NP} ([*is*]_V
[(△)]_{NP} [*under the desk*]_{PP}]_{VP}という深層構造をもち、*a book* が [(△)]_{NP} の位置に移動され、空になった文頭に*there* が挿入されて生じたものとされる。[(△)] と PP とは ()で括られているから、どちらも任意だけれども、二つのうち一つが必ず選ばれることになる。従って、[(△)] と PP とが両立する場合、[(△)] だけの場合および PP だけの場合の三通りが考えられるだけで、[(△)] も PP も両方ともないことはない。そこで、結局問題は [(△)] が選ばれるか否かということになるが、これは基底となる文の頭にある N が (−Def) であるときは選ばれ、(+Def) のときは PP だけが選ばれるのである。この制限をつけておかないと、*There is the book on the desk* とか *A book is on the desk.* とかいう文が派生されるおそれがある。

以上は *there* を基底文の主語である NP の穴うめに導入することであるから、*there* は NP にはかならない。Perlmutter は *there* はまぎれもなく NP の性質をもつと述べ、副詞説を否定しているし、一般にこれについては強い異論は出ていないようである。しかし、Perlmutter 自分も純粋の NP そのものでないことは認めているのであって、*I like there* とか *There is nice* というような文はありえない記している。*there* が NP だと彼らがいるのは、つまりは、それが変形によって生まれた existential be の主語の copy すなわち影武者という意味においてである。その限りでは、筆者も敢え異議を唱えるところはないのだけれども、ひっかかるところがあるのは、その前提として動詞の be が自明的に existential とされていることである。be は「ある」ということが原義で、Copula はそれから出たものだと筆者は考えるのであるが、それにしても be が存在をあらわすためには、God is のような特殊な表現を除けば、今日普通には、何か locative 的な要素が必要である。*There is a book.* という文で、*there* が locative でなくて NP であるとする、is が existential であるのは、どうしてわかるのであろうか。しかし、それは既に説明されていると恐らくいわれるであろう。なぜなら基底文には locative

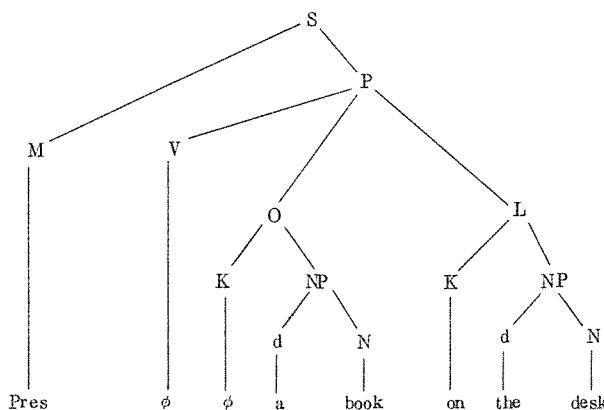
PP か locative dummyが設定されているからである。上に述べた (〔△〕 ()
PP)は実に巧妙な仕組みで、locative PPがなければ、もとの文頭が〔△〕
のところに来て、there が導入されるのが existential be の場合であるとい
うのであるから、このこと自体に文句をつけることはむずかしい。非常にすっ
きりとしたformulationというべきであろう。しかし、どこかがおかしい。引
用された文で、もしOn the deskがないときは、基底文はA book is△である
から、規則によって△はa book によって取って代られることになるが、この
△は何なのだろうか。当然NP である。そうすると thereが NPで△がNP す
なわち NP + be + NP ということになるが、それでも be がexistential で
あるのは、納得できない。それは問題ではない、なぜならここは existential
be がどう使われるかを定式化したものだから、といわれるかもしれないが、
それは一方的なような気がする。筆者はこの定式では△は PP と同じlocative
でdummy になっているものと解釈する。そうすれば、〔-Def〕のNP がこの
位置を占領するから、これが文頭にthere となって現われると無理なく説明で
きると思う。

鶏が先か卵が先かは、古来からの難問である。existential be が先か、
locative があるからbe が existential になるのかも同様であるが、少くとも現
在では、locative あってbe はcopuleと区別されると考える。それは表層での議
論だといわれるかもしれないが、筆者は表層は少くとも頗れる現実と思う。現
象の背後にはunderlying form があるとみるとすればすばらしい洞察であるが、
あまり乖離するのは慎まなくてはならない。この程度の深層構造は、決して普
遍でなく表層構造の一形態とみるのが正当な評価とも考えられる。(因みに申
せば、本当の普遍的な深層構造は、言理学的な「意図」の世界にしかないと信
するが、これは別に改めて語る機会があろう。)従って、このような深層構造
では be が存在を示すものであるためには、たとえdummy であってもlocative
を設定しておくべきだと思う。

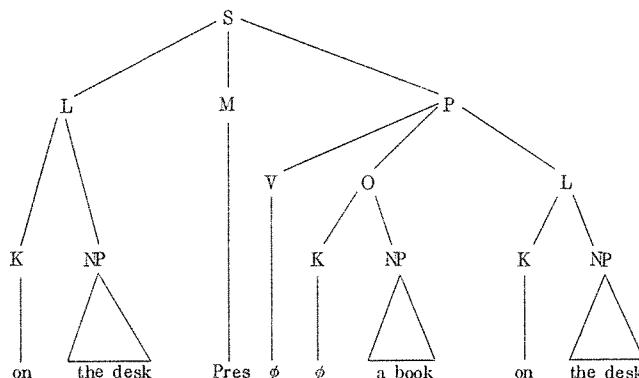
4. 2. there = Loc There-be 構文のthere をlocative としてい

る学者は1のthereに対する呼称を瞥見したときにも言及したように、数は必ずしも少くはないが、今日的な意味で考察の対象となる議論はあまり多くない。そのうち若干のものを拾ってみると、Fillmore('The Case for Case')は *There is a book on the desk* というような文の深層構造を図示すると次の(1)のようなものだと考えている。そのlocが copyされて図の(2)のようになり、それが文頭でthereに代られて(3)のようになるのである。

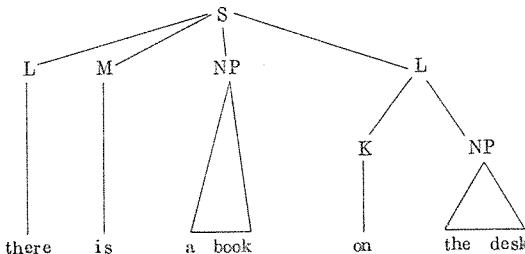
(1)



(2)



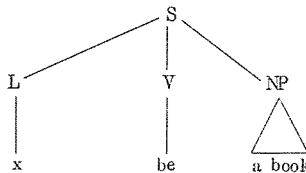
(3)



上図はFillmore流の格文法によるものだから、そのつもりで解釈して頂きたいが、be動詞の導入は自動的に行われるとして、locのcopyでthereが出現するとすれば、それがないbare existential sentenceのときは困ることになる。Onions (*An Advance English Syntax*) は、そんな場合には、文頭のthereは本来のLocative thereがweakなものとなって現われたものとするのであるが、そうすると、*There is a book there.*という文では文頭のthereのsourceがなくなってしまう。K.Allan(FL 7.1-18, 1971)は文頭のthereと文尾のthereとは別であって関係づけてはいけないという。文頭のexistential thereは実は彼にとってはspatio-temporal locationを示す独立したものなのである。すなわち、存在文では[−Def]のNPにはそのthereが導入されて、there-be構文が自動的にできるというわけである。*on the desk*のようなlocativeは、あってもなくても関係はない。

次に久野(『日本文法研究』—これは以前 *Linguistic Inquiry* に発表したものと趣旨は同じ)の論旨を見てみると、いろいろの論証があるが、結論は要するに *There is a book on the desk* という存在文の基底文は、*On the desk is a book.* ということで、*The book is on the desk.* という所在文と区別されるということである。これは三上(「存在文の問題」)、『大谷女子大学紀要』第3号、1969)も全くといってよい程同じ意見で、存在文はむしろ「位格文」としたらどうかともいっている。ともあれ、存在文はlocが先頭にくるのが自然な語順なのである。所在文はNPが(+Def)であるから

NP + be + Loc が自然であるが、存在文は NP が (−Def) なので上のようになる。具体的な場所規定を行なう Loc がないときは、(−Def) を文頭におくことは不自然であり、文頭に Loc を置くことが自然であるから、*There is a book* の基底構造は次のように図示できる。



すなわち、この場合 x が *there* となるのである。*on the desk* というような具体的な場所規定がある場合は、これを文尾の方に移すと、その空洞を充たす必要があるので、そこには *obligatorily* に *there* が用いられることがある。*there* は英語では存在文における不定の場所を示す形式的な副詞として確立した語である。それでは、なぜ具体的な場所規定がある場合、それが本来の位置から移されるかといえば、これは *optional* ではあるが、文頭の *there* が文導入の虚辞として英語では確立しているのと、具体的な規定のない場合と歩調が合うのと、存在文に類する現象文との連帶性によるというような理由があげられるであろう。

以上述べたことから、存在文における *there* がどうして出現するのか、その性格がどんなものなのかが明らかになったと思う。結局存在文は locative に支えられているのであり、be はその故に existential であり、*there* はその意味で indefinite locative の副詞であるということである。一般的な変形生成文法論者はこれを NP として、久野その他を批判するが、筆者は位格説、副詞説の方が「心情的」に納得しやすい。それでは、*there* を副詞とした場合、一致の原則はすらりと説明できるが、主語的に用いられているのは、どう説明するかということであるが、locative *there* が存在文であることの標識として *there-be* が固定した形式になってしまった以上、存在を意味することは、それを分離することができなくなったからである。*there* は「何かがど

「ここにあること」を含蓄しているのであり、具体的に存在する NP は there-be 全体によって refer されているのである。動詞 be は there の方に依存する割合が大きく、there-be が自己充足的な単位となっている。Glossematics 的に示せば、結論は $(\text{there} \leftarrow \text{be}) \rightarrow \text{NP}$ という関係になる。変形文法の考え方ならば $\text{there} \rightarrow (\text{be} \rightarrow \text{NP})$ となるであろうが、これは正しくないと思うのである。（なお、 $\text{be} \rightarrow \text{NP}$ としなかったのは、主述の関係でないことを示す。）このように there は NP でもなく主語でもないまま、上のような理由で、存在文におけるカナメとして構文上重きをなしているのである。これが表層構造で S+P 構造の Pattern に撮せられたため奇妙な構文が生れたわけである。この there を主語的というなれば、そう呼ぶのは勝手であるが、それも強いていえば Systemic Grammar でいう M-Subject であって、主語でないことは、一致その他の事実が証明している。there is + 複数名詞の場合も同様で、there + be 全体が独立化したのであり、決して主語 + 述語になつたものではない。Do there have to be wars?--No, there don't も上で示した $(\text{there} \leftarrow \text{be}) \rightarrow \text{NP}$ で説明がつくはずである。

本稿は存在文 there-be の特に there に焦点をあてて考察したのであるが、途中でも触れたように、存在文ではなくて there を文頭におく特殊な構文が幾つかあるし、また there-be の存在文自体の中にも NP が (+ Def) であったたり、Kimball が指摘しているような There is a dog in the manger. はよいが *There is space in the manger. は非文法的といったような問題もある。またある文が there-be 構文で paraphrase できるかどうかというような大きな syntax 上の争点になることもある。Here-be などと区別される要因などもさぐりたい。これらは、いずれ別に稿を起して述べるつもりである。